

聖書：使徒7：44～60

説教題：ステパノの殉教

日時：2013年9月22日

ステパノの説教の最後の部分です。彼はユダヤ人から、「この人は神殿と律法とに逆らう言葉を語るのをやめません」と訴えられていました。彼は「あの7人」の一人として仕える中で、イエス・キリストが開いてくださった新しい祝福について語ったものと思われます。すなわちイエス様ご自身がからだを指して「この神殿をこわしてみなさい。わたしは三日でそれを建てよう」と言われた言葉を引用して、今や私たちが神に会い、神を礼拝するのはイエス・キリストにおいてであるということ語ったものと思われます。また律法については私たちの救いに必要な律法の要求をキリストがすべて満たしてくださった。だからこれまでのように罪のためのいけにえをささげる必要はなく、キリストにより頼めば良いのだ、と語ったのだと思われます。しかしユダヤ人にとって神殿と律法は、自分たちが選民であることを示す宝の中の宝でしたから、いくらかでもその価値を引き下げようと言う者は、神とモーセを冒とくする者だと思われました。そこで彼らはステパノを訴え、最高議会サンヘドリンへ連れて行ったのです。そしてステパノは自分の立場について弁明し、また神の御心について説教せざるを得ない立場に追い込まれたわけです。これまで見て来ましたように、彼はイスラエルの歴史を振り返ることによって、そこに示されて来た神の真理を明らかにしようとしてつとめています。すでにアブラハム、ヨセフ、モーセの時代について見ました。今日の44節からの部分で、あかしの幕屋について取り上げます。

このあかしの幕屋はエルサレム神殿の前身です。昔イスラエルが荒野を旅する間はもちろん神殿を持つことはできません。もし宮を持つことができるとすれば、それは彼らと一緒に移動できる宮、持ち運びできる宮でなければなりません。それがここで取り上げられている幕屋です。それは後のエルサレム神殿に比べればはるかに簡素なものでしたが、その時代に十分に神によって用いられていたことにステパノは注目させます。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりに造られていました。その幕屋は次々に受け継がれ、長い期間に渡って用いられました。そして約束の地に入った時にはヨシュアと共に運び込まれ、その後、ダビデの時代になりました。ダビデはそれまでのテントのようなものではなく、恒久的な宮を建てたいと願いましたが、神はそれをよしとせず、実際に宮を立てたのはソロモンでした。そしてソロモンは神殿を造り、主にささげる時に何と言ったでしょうか。48節に「しかし、いと高き方は、手で造った宮にはお住みになりません。」とありますが、これはソロモンが神殿奉獻の際にささげた祈りの言葉に見られるものです。1列王記8章27節：「それにしても、神ははたして地の上に住まれるのでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。」また預言者も同じことを述べました。49節と50節で引用されているのはイザヤ書66章1～2節の言葉です。ここにも神は人が造った建物に閉じ込められるお方でないことが言われています。

ステパノはこうして、歴史を振り返るなら、そこには神殿を絶対必要不可欠のものとしたり、これを神と同一視し、神聖視するような考えはないことが分かるということを示しました。ユ

ダヤ人はステパノは異端的で危険な思想の持ち主だと非難しましたが、正しい道から外れているのはむしろユダヤ人たちの方でした。彼らこそが、御言葉から外れて、勝手に神殿にしがみつき、自分たちが好む仕方では宗教生活を送っている偶像礼拝者であったのです。

ですから彼は結論部分で彼らの誤りをはっきりと責めます。51節：「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。」神の御心を受け止めず、自分の好きな道を行こうとする彼らは、外面的に割礼を受けてはいても、聖霊に逆らっている者である。52節：「あなたがたの父祖たちが迫害しなかった預言者がだれかあったでしょうか。」先週見ましたように、イスラエル人はモーセや預言者を退ける生活を重ねて来ました。その彼らの性質を受け継いで、あなたがたは神が送った最後の預言者、究極の正しい方イエス・キリストを殺した。そして53節：「あなたがたは、御使いたちによって定められた律法を受けたが、それを守ったことはありません。」

このステパノの説教を聞いてユダヤ人はどう反応したのでしょうか。54節に「人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで」とあります。欄外には直訳で「心をのぎりで引き切る」とあります。いかに彼らの心が激しくかき乱されたかが言い表されています。それで人々はステパノに襲いかかります。そして彼は新約の教会最初の殉教を遂げます。それはそれは残酷な死であったと思われまふ。しかしそれは単なる悲劇的な死としては描かれていません。むしろ浮き彫りにされていることは、ステパノが死の瞬間においてさえも見せた立派なあかしです。特に彼の三つの言葉に注目したいと思ひます。

一つ目は56節：「こう言った。『見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。』」聖書の他の箇所ではイエス様は天に昇られた後、神の右に着座したと言われています。イエス様はご自分に与えられた使命を全うされたので、神の右に坐しておられる。なのになぜここでは立っていたのでしょうか。理解の仕方には二つあります。一つは間もなく殉教しようとしているステパノを迎えるために身を乗り出すようにしておられたということです。良くやった、よいしもべだ、とねぎらって、主は愛するしもべをご自分のもつとに迎え入れるために立ってくださっていた。もう一つは、イエス様は天の法廷で証言するために立っておられたという見方です。マタイ10章32節：「わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。」地上でステパノは断罪され、殺されようとしています。天の法廷ではイエス様がステパノのために証言し、弁護しておられた。証人は立って証言をしますから、まさにそのことをイエス様は父の右で行なっておられた。このいずれであっても、ステパノにとっては大きな励ましのメッセージを意味したでしょう。地上で自分がどのように扱われようとも、イエス様が私を見ておられ、私を弁護し、私を究極の幸いに受け入れてくださる。ですから私たちのすることは、からだしか殺せない人を恐れることではありません。私たちは人の評価ではなく、神からの賞賛を求めて、神に忠実であることを何よりも求めて行けば良いということです。

二つ目は59節：「こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。『主イエスよ。私の霊をお受けください。』」思い起こすのは、イエス様の十字架上の「父よ、わが霊を御手にゆだねます。」という祈りでしょう。イエス様は地上の働きをすべて成し遂げて、地上の命を終わろうとする時、このように祈られました。そこに示されて

いることは何でしょう。それはこの地上のいのちがすべてではないということです。死後の世界があるということです。その状態においても、自分をあずけることができるお方がいる。いやこの世のわざを終えて、私たちはその時、自分の本当のふるさと、自分のホームに帰ることができるのです。その家に帰るために、地上の命の最後の日に、このように言える人は幸いです。多くの人は死んだ後、自分がどこに行くか分からないでいます。しかしイエス様は、ご自身を信じる者たちに永遠の命を約束されました。ヨハネ 10 章 28 節：「わたしは彼らに永遠の命を与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」そしてイエス様はこの時、ステパノを迎え入れるために、立ち上がっていて下さいました。ステパノは石を投げつけられる中、いよいよ自分の本当の家にたどり着くことを望み見て、自分の霊をイエス様の御手にお任せし、死の向こうにある幸いへ進むことができたのです。

もう一つの言葉は 60 節：「そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。『主よ。この罪を彼らに負わせないでください。』」普通このような状況では、裁判の不当性を訴え、敵に対する呪いの言葉を発して当然ではないでしょうか。しかし彼が最後に大声を出して祈ったことは、「この罪を彼らに負わせないでください」であった。これもまた、十字架上のイエス様を彷彿とさせる祈りです。ステパノがいかにイエス様との深い交わりの中に生きていたかをこれは示しています。彼は自らが主から測り知れないあわれみを頂いていることを心から感謝していました。そのようにあわれみを真に受け取った人は、必ず他の人にもあわれみ深くあるようにと導かれます。彼は主にあって自分の永遠の行き先については解決を持っていました。そういう人は死に際でも自分のことで頭が一杯になるのではなく、他者の救いのために心を注ぐことができる。イエス様と一つ心になっている者であることを示すことができたのです。

もう 2 点、短く心に留めたいことがあります。一つは 60 節最後の「こう言って、眠りについた。」という表現です。ステパノが受けた暴力とむごたらしい扱いとは対照的に、何という平和がここにされていることでしょうか。主を信じる人にとって、死はこのようなものです。眠りにつくというのは、やがて起き上がる日が来ることを前提にしています。主を信じる者の死は、やがての復活の日に起き上がるまでの、一時的な休み・眠りにしか過ぎないのです。

もう一つは今日の箇所、後にパウロとして福音のために大きく用いられるサウロが出て来ていることです。58 節、8 章 1 節、22 章 20 節。そのサウロがここに出て来ているのは、ステパノの殉教がサウロの後の回心と深く関わっているからではないでしょうか。ステパノは 60 節で「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」と祈りましたが、その祈りは確かに聞かれたのです。このステパノの姿はサウロの中に決して消えることのない記憶として刻みこまれ、その後の彼の歩みに大きな影響を与えたと考えられます。とするなら、ステパノの殉教は空しいどころか、大きく報われたこととなります。彼の知らない所で、彼の生き様、死に様はとてつもない影響を与えた。それはそれ以後のすべてのクリスチャン、今日の私たちに対しても、です。

以上のステパノ物語。6 章後半から彗星のごとく現れたかと思うと、次の 7 章では地上の最後の一日が記され、そこで殉教の死を遂げます。読む私たちは衝撃を受けます。しかし思い巡らす中で思わされることは、地上の人生が長いか短いかはそんなに重大ではないということ

す。ステパノは真理についてはっきり語ることを控えれば、もう少し長生きすることもできたでしょう。しかし真理に妥協して、長生きして、それで一体何が良いのでしょうか。生きる時間が長かろうが、短かろうが、真に大切なことは、主に忠実に歩むことであるということ。私たちはこのステパノの記事から思わされるのではないのでしょうか。主の御心によって死を迎えるのが他の人より早い人、あるいは遅い人、色々でしょう。しかし早く死ぬ人は主からのねぎらいが少ないというのではない。主はステパノのために立ち上がってくださり、良くやった、良いしもべだと言ひ、その労をねぎらって迎え入れてくださいました。ステパノは主の救いに感謝して、大いなる平安と喜びをもって、主の恵みの御手に自分をささげて行きました。私たちも地上のいのちがいつまでかは分かりません。主に従うなら、その人の前には一人一人、主の御名のための戦いや労苦があります。しかし主は上から常に守り導いてくださり、ご自身がよしとする時に、私たちをみもとへと立って迎え入れてくださいます。私たちは地上で死ぬという、地上的な観点からは最も悲しいことが起こるその日にも、心からの平安をもって主が招き入れてくださる祝福へ入って行くことができます。私たちも主に最後まで忠実な歩みをささげることができるように祈りましょう。そしてステパノのように、死においても主の栄光を証しし、さらに他の人が救いに導かれるためにも用いていただく主のしもべの光栄と幸いに生かされていきたく思います。